
とあるたくさんの物語

青草須核

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とあるたくさんの物語

【Nコード】

N9408T

【作者名】

青草須核

【あらすじ】

いろいろな世界で生活しているいろいろな人達の平凡な日常を書いた物語

(これはすべてフィクションだと思えます)

とある少年のとある1日のとある1とき・その1・

オレはノートと教科書を交互に見ながら、朝の教室で自習をしていた。

一応言っておくと、普段からこんな事をしているわけではない。

今は誰もがそうすべき時なのだ。

なぜなら今日は定期考査、いわゆる期末試験の日なのである。

周りではクラスの皆が問題を出し合って、少しでも単語を覚えようとしている。

「空気中の水蒸気が凝固し始めるときをなんというか？」

後ろの席で、誰かが誰かに問題を出している声が聞こえてきた。

俺は誰にも聞こえないように小さな声で、「露点」と呟いた。

問題を出された側の人は、「うゝん」と唸っていた。

どうやら答えが分からないらしい。

「秋、答え分かる？」

俺は何かの間違いで『盗み聞き』をしたと思われないうちに、

「問題なに？」

と、聞いた。

「えーと、空気中の水蒸気が凝固し始めるときを何というか？」

問題を言い終わるとすぐに俺は答えた。

「『露点』……じゃなかった？」

「これくらいなら秋には楽勝か」

そう言いながら『進研ゼミ』と書かれた問題集のページを捲り始めた。

どうやらまた問題をだすつもりのようなのだ。

ページを捲る手を止めて開かれたページを10秒ほど見ると、問題を読み始めた。

「凝灰岩から無色鉱物2種類見つかった。

その鉱物の組み合わせとして最も適当なものを、次のア～オから1つ選んで記号で答えなさい。

ア、輝石と石英。イ、長石と石英。ウ、角閃石とかんらん石。エ、長石と角閃石。オ、輝石とかんらん石」

「『イ』」

俺は間髪を入れずに問題で言われていた通り記号で答えた。

「即答!？」

しかも合ってるし!？
うっわ、流石は天才だなあ」

「天才言うな。
じゃー今度俺からな」

「どんな教科でもドーンと来い！」

「じゃあ、World Heritage siteとはどういう
意味でしょうか？」

「はっはっは。中学生レベルの範囲で頼むよ」

「中学生レベルの参考書にあっただけど……」

俺がそう告げると、

「……う……うわー！」

と、叫びながら教室から出てトイレがある方へと走っていった。

「勉強再開……」

そう言って俺は勉強を再開した。

実を言うと、彼が走っていってしまうことはこれまでの経験上わかっていたことなのだ。

だからこそ、言ったのだ。

自分は勉強は1人でやった方が頭に入るし集中出来る、つまり1人で勉強したい派なのだ。

一通り教科書に目を通して、パタンと閉じた。

そして、今回も100点いけるなーと思った。

普通の人からしたら、痛い奴だとか思われるかもしれないけれど、俺の場合はそれは当たり前のことだった。

俺は巷で『神の子』や『神童』などの異名を持つほどで、今は中2だが全教科で高2までの過程をすべて終えているほどである。

そんなことを考えていると授業開始チャイムがなった。

先生が回答用紙と問題用紙を配り始めた。

急いで教科書とノートを鞆に閉まって、チャックをしっかりと閉めた。

配られてすぐに回答用紙に自分のクラスと出席番号と名前を書いた。

いつも通り解答を問題用紙に書いていく。

後で見直しができるようにするためである。

10分ほどですべて解いて、大きな欠伸をひとつした。

簡単だなーと思って問題用紙に書かれた解答を解答用紙に写そ

うとした。

すると急に、強烈な睡魔に襲われた。

昨日はテスト前ということでもより2時間も遅く寝たのだ。

テスト時間は残り35分以上ある。

周りから聞こえるシャーペンのカリカリという音が、睡魔を余計に強烈にしているようだ。

どうせ解き終わってるし少しぐらい寝て良いかなと思い、結局睡魔に身をゆだねた。

「秋」

気が付けば、俺は後ろの席の人に揺らされていた。

「今テスト中だろ」

「何寝ぼけてんだよ。もうテスト終了のベルなったぞ」

「えっ!？」

慌てて時計を見るとテスト終了1分後になっていた。

そして、自分の解答用紙を見た。

自分の起こしてしまったことにひどく後悔しながら、名前しか書いていない解答用紙を先生に提出した。

とある少年のとある1日のとある1とき・その1・（後書き）

読者の皆様へ

この小説を読んいただき、誠にありがとうございます。
評価、感想をお待ちしています。

とある少年のとある1日のとある1とき・その2・

オレはいつも通り学校へ向かって歩いていった。

現在の時刻は7…40。

いつもは8…00に学校に着いているので予定通りならば、後20分に着くことになる。

話は変わるが少しオレの自己紹介をしよう。

といっても歳や身長のことについてではなく、オレの性格についてである。

オレは普段はクラスでムードメーカーをやっているいつもおちゃらけている奴だ。

しかし、オレのことを知っている小学校からの友人によると「やるときは他の奴らが真似できないような、誰もがお手本にするべき人間」らしい。

これは、どう考えても過剰評価だろう。

それを裏付ける理由ならいくつでもある。

まず偏差値は45程度、運動神経は人並み。

先生に殴りかかったこともあれば、クラスメイトの嫌いな奴に「オレお前のこと嫌いだから話しかけないで」とまで言った事がある。

そんなオレが『お手本にするべき人』までと言われたのは、中2の頃にある事件があったからだろう。

その事件というのが、『イジメ』であった。

『イジメ』というのは『イジメ』られている側の人間を庇うと、庇ったほうが次の『イジメ』の対象になってしまう。

そして学校ならどこにでもあるであろう『イジメ』、それをオレのクラスでは皆が行っていた。

目立ちたがり屋というかムードメーカーというか、その種の人間はKYになりやすいのかわからないが、オレはKYだった。

そのせいで『イジメ』が行われていることを知ったのは、クラスメイト全員が『イジメ』に加担したあとだった。

それをオレは見て、クラスメイトはオレに加担するように進めた。

オレは全力で拳を振るった。

「お前ら……なにしてんだよ……!!」

オレは目の前で『イジメ』をしていた奴ら3人を殴り、騒ぎを聞きつけた他のクラスの先生達に止められた。

オレは先生達にずっと叫んだ。

「あんたらは何してんだよ！ケンカは止めてもイジメは止めないのかよ！離せよ！イジメをしている奴ら全員が悪いに決まってんだろ

！」

ずっと叫び続けて、気づけばオレは自分の家にいた。

学校から親と来るように電話で呼び出しがかけられた。

翌日に校長室でオレ、オレの母、校長、担任の先生が1つの机を囲んで座っていた。

担任がオレのしたことをオレの母に話した。

話の最中にオレは何度も叫んだ。

「なんでオレが悪いんだよ！イジメをしたほうが怒られないでなくてオレが怒られるんだよ！」

オレの母は「やめなさい」と言った。

オレは担任の先生と母に何度も叫んだ。

話が1時間して終わったて校長室から出ようとしたとき、担任の先生はオレの母が先に出たを見て、オレを呼び止めた。

担任の先生は目を伏せて言った。

「……オレは『イジメ』をされていたのを見て見ぬフリをしていた。こんな事が起こったのにはオレに責任がある……」

先生の話が終わると、オレは何も言わずに母の後を追った。

廊下を歩いている時に周りの生徒が、

「……ねえ、あの子でしょう。2年でケンカがあって3人を大怪我させたのって……」

そんな声をオレは無視して廊下を歩いた。

家でオレは昼飯も夕飯も食わずに家で泣いた。

次の日に行きたくなかった学校に行くと、大怪我させた3人がオレのところに来て言った。

「ごめん、オレ達が悪かった」

そう言って、同じように『イジメ』ていたほうにも謝った。

他の生徒達も全員、後から謝っていた。

それからはオレの学年で『イジメ』を全く見なくなった。

本当はしているのかもしれないが、オレは皆を信じている。

だって、『イジメ』られていた奴と『イジメ』ていた奴とが一緒に笑えたんだから。

クラスのみんなが本当の友達なんだから。

気がつけばもう8…10になっている。

今オレは高校2年だ。

あの事件から3年が経っている。

そろそろ学校が見えてきた。

予定より10分も遅れたのは、イジメに自殺をしようとしていたクラスメイトと通学路の橋であったからだ。

「イジメを終わらせに行こう」

オレは今にでも道路に飛び出しそうな顔をしてるクラスメイトに手をだしながら言った。

今度の事件は難しい。

なんとって昨日はナイフで腕が切られたんだから。

それでも、オレは誰かが傷つくのは嫌なんだ。

そういえばオレが嫌いと言った奴とイジメられていた奴は同一人物だったな。

最後に、この世界からイジメ、差別、傷がなくなりますように。

オレはそう望んだ。

とある少年のとある1日のとある1とき・その2・（後書き）

・その2・は学校行くときに思いついた話です。

・その3・もまただすのでよろしくお願いしますm（（m

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9408t/>

とあるたくさんの物語

2011年10月9日01時03分発行